

財団だより

多摩川

1982. 12. 第16号



サカマキガイ (汚濁に強い種類)



冬枯れ間近の野川 (小金井市野川公園付近)

■多摩の地名■

⑧ 多摩の語源

さらに奈良時代の『万葉集』には「多摩河」が出てくるのであるから、すでに「多摩」は地名として定着していたのであろう。多摩という地名は、多摩川の中流域を中心に広まったように考えられるので、多摩を「田間」とすれば、少なくとも多摩川中流域には、奈良時代には、水田が相当発達していたと考えねばならない。

しかし多摩川流域の農業の発達を考えると、タマが「田間」であるとするには、すこしむりがあるのではないだろうか。八世紀の奈良時代には、「多摩」の名が定着していたのであるから、少なくとも、水田耕作を伴った弥生式文化の遺跡が、多摩川中流域に相当発見されなければならないであろう。残念ながら多摩川沿岸は弥生式文化の遺跡にとぼしい地域である。さらにそれにづく古墳文化の遺跡になると、多摩川下流に集中していて、中流にかけてはわずかに狛江古墳群がみられる程度である。とくに中流、上流にかけては、二、三の小規模古墳はあっても古墳群といったものは見あたらない。

また多摩川の水利を考えてみるに、多摩川はごく最近までしばしば洪水が起り、沿岸に大きな被害を与えている。

水利技術の未熟な古代には、多摩川の氾濫原などの水田経営はとうてい不可能であったのではあるまいか。おそらく支流の浅川、大栗川、野川などの流域やそのまた支流の小河川の沿岸、あるいは丘陵の谷戸田を細々と耕作していたというのが、実情ではなかったらうかと思われる。

多摩に水田が広がり、「田間」が「多摩」になったという考えは、言葉としてはおもしろいが、七、八世紀、多摩の地名が初めて文献にあらわれたころを考えてみると、ややむりのように考えられるのである。

多摩の語源について、諸説を紹介してみた。それぞれに意味はあって、これが定説というものはない。ただ「多摩」という地名もここだけでなく、ほかにもあるし、とくに「多摩川」(玉川)という川の名などは、「近畿以西にとぼしく、東国から東北にわたって濃密に分布し、京都、大阪、和歌山、滋賀、静岡、神奈川、東京、茨城、山形、宮城、青森の一都二府八県に及んでいる」(『昭島市史』91頁)という。このことを十分注意しながら、さらに比較検討していく必要があるであろう。(終り)

(多摩の地名、保坂芳春・1979・武蔵郷土史刊行会)

多摩川散歩

●筏道とその周辺(二子玉川より喜多見まで)

多摩川の筏流しは、江戸初期より大正の末頃まで行われ、特に幕末から明治初期には盛んであったといわれている。

「きのう山下げ 今日青梅下げ

明日は羽村の堰下し、

と筏流しの唄が今も青梅地方では唄われている。

江戸期270余年の間に、江戸府内で約97回に余る大火があったと記録されており、木材の需要に近在物の青梅材が地廻り荷として重要な資材であったであろう。

青梅材は奥多摩の山中から切り出された檜や杉材で多摩川の上流から下流へと筏に組んで輸送されたもので、記録によれば、青梅の千ヶ瀬河原で筏に組まれ、下流の六郷八幡塚まで下り江戸商人に引き渡されたという。

筏の乗子は丈三(約3.94m)の棹1本に命を托し、羽村の堰をはじめ、10数ヶ所の堰落しを全て八幡塚に着くのは4~5日後で、順調に行けば往復7日といわれているので、復路約64軒は2日かかったことになる。

筏道……筏の下った多摩川の水路も筏道といえようが、通常、筏の乗子が目的を果たして三々五々青梅に向って帰って行く道を土地の人は「筏道」と呼んでいる。

筏道は俗称であり、この道は多摩川北岸添いの古道で、品川道あるいは六郷池上道と呼ばれた道であろう。江戸時代に建てられた道標でこの名称が刻まれているものが喜多見辺に現存している。

この筏道は八幡塚より矢口附近を通り新田神社の前を至て丸子附近より旧六郷用水(現

世田谷区文化財資料調査員 田中 隆之

丸子川)添いを西上し、世田谷区の二子玉川から多摩川土手添いに入り、鎌田、大蔵、喜多見を至て狛江市岩戸の二之橋で今の世田谷通りに出る。

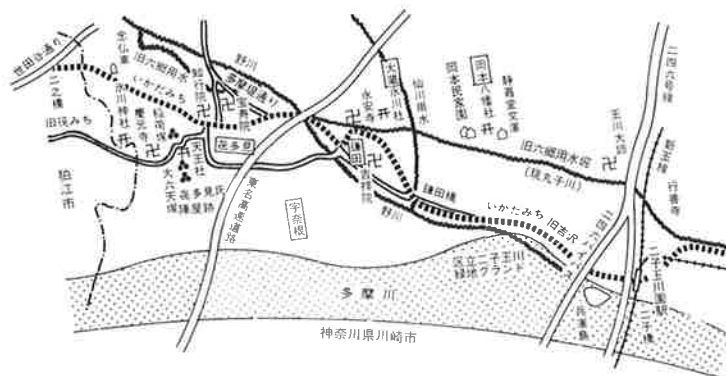
大蔵までは殆んど多摩堤通りとなって道も拡幅され、昔日の面影は見られないが、喜多見に入ると多摩堤通りより別れ、むかしの筏道になり、消えゆく筏道の姿がや、残されている。

新玉川線二子玉川園のガードを過ぎると旧砧村(今は世田谷区)に入る。左手に多摩川が一望され、中州にある小さな島は南北朝の頃、新田義興の臣、由良兵庫助の屍が流れ着いたという伝説から兵庫島と名付けられている。

右手の国分寺崖線には静嘉堂文庫、岡本八幡社区立岡本民家園が遠望され、鎌田の集落には天平の頃草創と伝わる吉祥院、大蔵に入り氷川社や鎌倉大蔵谷より遷ったという永安寺がある。

更に喜多見の集落に入ると、区文化財の阿弥陀如来を本尊とする宝寿院や知行院があり、筏道近くには江戸氏喜多見氏の菩提寺である慶元寺、鎮守氷川神社、江戸神社の分祠と伝う天王社などの古社寺や区指定文化財の稲荷塚古墳、大六天塚古墳などもあり、神送り庚申塚にある念仏車を最後に筏道は狛江市に入る。このあたりは歴史散歩コースとして好適の地で訪ねくる人も多い。

二子周辺の筏道と史跡図



私と多摩川



私立戸板女子高等学校教諭 戸部 英 貞

昭和11年調布に生まれ、そこで育った私にとって多摩川は計り知れないほど多くのものを与えてくれるような気がする。遊び道具もほとんど無い幼年時代にとって、川は限り無い遊び場を提供してくれるだけでなく、それを通して学ぶことも多かった。

誰れに習うともなく泳ぐことができるようになって初めて対岸に泳ぎ着いた時の喜びは、まるで異国の地を踏んだような心地で興奮を押さえることができなかったことを今も思い出す。また道具らしい道具をほとんど持たない時、唯一の自慢の箱目鏡を使って覗いた川の中は、それまで見て来たものとは一変した世界で、一匹一匹の魚や昆虫の表情が掴め、自分もその中の一員であるような身近さを感じたものだった。

魚釣りも現在のような立派な道具があるわけではなく、糸の先に釣り針を付けただけの仕掛けに、カゲロウの幼虫を餌に、瀬の中で釣るあんま釣りと呼んでいた漁法の針に魚がかかると、あばれる魚の振動が直接身体に伝わって、竿を使った釣りではとても味わうことのできない感動を覚えた。その他、夕方に仕掛け、日の出前に引き上げる流し針と呼んだ漁法では日頃はとて捕ることのできないような大きなコイやナマズがかかり、それを引き上げている時の興奮など、数えればきりが無いほどの感動が今もはっきりと甦って来る。

その多摩川は、今も当時と何一つ変わった様子もなく流れ続けてはいるが、そこに棲む生物達や河川敷の様子は大きく変化してしまった。アメリカザリガニを捕った話を頼りに、帰る道がわからなくなるほど遠くまで探し歩いたことや、初めて見たカムルチー(雷魚)の恐ろしさに、しばらくは川に入るのを躊躇したことなどは多摩川への新しい侵入者との出合だった。それに反し、当時は湧水の中で踊るようなディスプレイをしていたスナヤツメや石の下から愛嬌のある顔で見上げていたカジカ、うっかり掴んで飛び上るほど痛い目に合ったギバチ、石を退ければどこにでもいたシマジョウなどは今では姿を見かけることがなくなってしまった。

川の中だけでなく、毎年のように繰り返された洪水が、上流にダムが作られてからは少なくなりそれと同時に石ころだらけだった川原が、いつのまにか石を探すのに苦勞する草原と化してしまった。その結果シギやチドリの群れに替ってキジが鳴き、鳥かごの中でしか見たことのないベニスズメやギンバラチョウのさえずりを聞くようになった。

夕暮れまで遊んでしまい、家路をたどる頃に足元を照らすように咲き乱れていたマツヨイグサは、いつしかオオマツヨイグサ、アレチマツヨイグサと遷移し、今ではさらにアレチウリやオオブタクサの群落に変わってしまった。

河川や河川敷の生物の変化は生活污水や工場排水の流入が大きな原因となっているが、それだけでは説明の出来ない生物界の遷移と言う大きな力が働いているように思われる部分もある。

失われてしまったカジカやギバチが戻って来られるような川を甦らせるために、水質を回復させる手段を講じると同時に、生物の遷移がクライマックスの状態ではない現在、次の世代へ送る現代の記録として、克明な環境調査、取り分け定期的な植生の記録を残して行くことが我々に課せられた任務であると強く感じるのである。

よみがえ

甦れ！多摩川

かつては水害など考えもしなかった所に、ひんぱんに浸水騒ぎが起るようになってから久しい。高地での浸水は、雨水が道路側溝を逆流する事によって住宅にあふれ出すために起る。つまり、雨水が逃げ場を一時的に失なうためである。地表が市街化する以前は、その逃げ場の最大が地下であった。そして、それでも余った水が川へと流れていったのである。ところが、市街地はアスファルトやコンクリートで地表を被うため雨水が地下浸透しない。この事によって発生する問題は高地の水害ばかりではなく、河川の氾濫、地下水位の低下による地盤沈下、地下酸欠、植物の生育条件の悪化などに波及している。そして、この事は都市化を進めるにあたって最大の問題になりつつありこの解決なくしては都市開発は進まない。特に、大規模宅地開発では不可避の問題である。

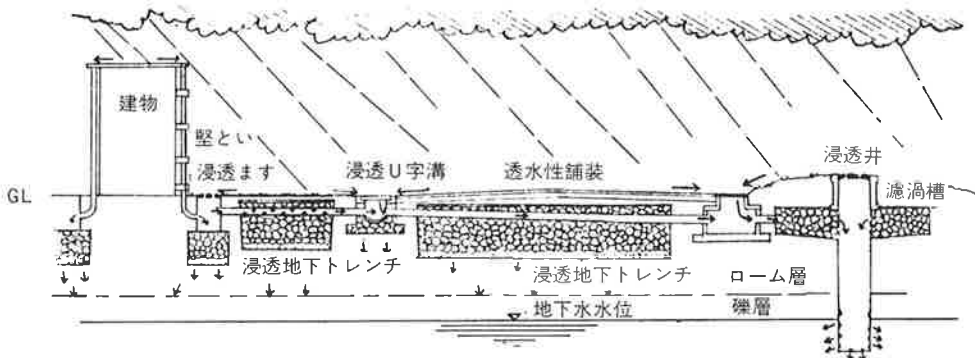
住宅、都市整備公団では、開発に伴う河川改修、工事公害、それに伴う開発量の増大等でこの問題に直面していた。昭和45年に入居が始まった立川市の幸町団地では、井戸法と呼ばれる方式で浸透させていた。これは、地下水帯まで井戸を掘りそこに雨水を流し込むのであるが、7 haの団地に外径80mm深さ平均17mの井戸を20本設置している。これによって、その団地の雨水は、ほとんど地下へ浸透できるようになった。ところが、こ

の方法は直接地下水帯へ流し込む為、地下水の汚染や、一時的に貯留する池などが必要な事から、最近では別の方法に移行しようとしている。下図は、昭島市のつつじが丘団地の施設である。この方法は、掘水法と呼ばれ、地表に近い、ローム層に、トレンチと呼ばれる砂利層を人為的に造り、そこから徐々に地下へ浸透させていこうという方式である。

このトレンチは、浸透枘、浸透U字溝、などで組み合わせられ、団地内にはりめぐらされている。つつじヶ丘団地は、昭和56年に入居が始まった約27.8 ha、2,673戸の団地であるが、実績として、いままでの総流出量（団地外へ流れ出る雨水）の93%をこの方法で団地内で地下浸透させた。

武蔵野台地の地下水は、ハケ（段丘崖）下の湧水として湧き出し、古くから生活と生産の場を与えてきた。しかし、台地上の市街化に伴ない枯渇したり、汚染されてきた。それでもなお、多摩川中流部の唯一の支川とも言える野川を、死の川の一手前で守っているのが、この湧水でもある。地下に雨水を戻すという団地開発からの発想は、野川の再生が動機ではないが、ひとつの光明もとれる。しかし、この雨水の地下浸透と無秩序な開発とは別問題である。本来、秩序ある土地利用と適正な開発であれば、こうした方式は無用であるはずであった。この基本は忘れてはなるまい。

地下浸透工法 昭島市つつじが丘ハイツの例



《 “多摩川およびその流域の環境浄化に関する 調査・試験研究” 募集 》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行なってきました。既に119件の研究に対して助成金を交付し、59件の研究成果を得ることが出来ました。

昭和58年度も引き続き大都市東京圏における「多摩川およびその流域の環境問題に関する調査・試験研究」をひろく募集いたします。

対象者は、多摩川およびその流域の環境問題に関する調査・研究に意欲のある方でしたら、どなたでも応募できます。

研究対象

(1) 産業活動または生活環境と多摩川およびその流域との関係に関する調査・試験研究

我国は石油ショック以来、産業構造の転換とそれに伴う生活環境の変化がさまざまな社会現象を伴いながら複雑な動きをしています。この産業構造の転換、生活環境の変化が多摩川流域にどう影響するかは、むづかしい問題ですが、多摩川流域よりも広い地域（例えば東京都圏）から多摩川流域の位置づけをどう考えるかの研究をする時期が到来したと考えます。従って産業活動、生活環境の研究を通じて土地利用、都市計画、文化活動等未来を指向した視野の広い観点に立った研究を募集します。基礎研究、総論研究でも結構です。

(2) 排水廃棄物などによる多摩川の汚染の防除に関する調査・試験研究

水質調査は精緻なもの、地区ごとのもの、環境教育に役立つもの等応募者は増えました。多摩川の変化に応じた、水質調査は引き続き募集してまいります。排水・廃棄物などのリ

年度別助成件数・助成金額

年 度	研究 区分	助 成 件 数			助成金額(円)
		新規	継続	計	
昭和50年度	A類	6	—	6	9,500,000
	B類	—	—	—	—
	計	6	—	6	9,500,000
昭和51年度	A類	5	6	11	19,994,120
	B類	—	—	—	—
	計	5	6	11	19,994,120
昭和52年度	A類	17	4	21	28,285,010
	B類	6	—	6	1,984,900
	計	23	4	27	30,269,910
昭和53年度	A類	8	14	22	28,401,840
	B類	6	5	11	2,892,500
	計	14	19	33	31,294,340
昭和54年度	A類	11	13	24	36,875,240
	B類	7	5	12	3,381,490
	計	18	18	36	40,256,730
昭和55年度	A類	12	13	25	39,277,250
	B類	7	6	13	2,672,800
	計	19	19	38	41,950,050
昭和56年度	A類	9	13	22	40,973,500
	B類	4	5	9	2,187,400
	計	13	18	31	43,160,900
昭和57年度 (10月20日現在)	A類	13	10	23	31,814,635
	B類	8	4	12	4,369,870
	計	21	14	35	36,184,505
合 計	A類	81	73	154	235,121,595
	B類	38	25	63	17,488,960
	計	119	98	217	252,610,555

サイクリングの研究は少なく、この関係の応募者が待たれます。ケース・スタディでも結構です。

(3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究

行政レベルで扱われているような大規模研究以外の小規模な水利用に関する研究又は実験を流域内でケース・スタディできればと考えます。大規模研究の補完研究でも結構です

(4) 多摩川をめぐる自然環境の保全・回復若しくは環境創造に関する調査・試験研究

生物生態関係の調査研究は息の長い研究です。今後も根気よい研究は続けてゆき、生物生態と環境の研究成果も蓄積してまいりました。自然環境管理に関する実験などあってもよい研究と考えます。

以上、多摩川及びその流域の環境問題を広義に捉え、自然科学関係は勿論のこと、人文・社会科学関係も応募の対象になります。

公募締切日 昭和58年1月31日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

なお、57年度分として未消化の助成金が若干残っております。例えば、洪水等の影響により緊急を要する調査・研究で昭和58年3月以前に研究に着手したい方は財団まで問い合せ下さい。

**〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号
(地下鉄ビル内)**

電話 (03) 400-9142

(財)とうきゅう環境浄化財団

〈財団事務局より〉

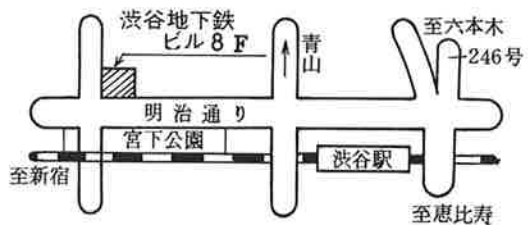
公益法人が行なっている「研究助成」の制度は、まだ、わが国ではなじみが薄いようです。

個人又はグループで研究を行なおうとする時、自己資金で研究費を賄いきれない場合、それに対応する制度は、二つの方法が考えられます。一つは、官・民の法人と請負又は委託研究などの契約を行なう事による方法と、研究に対し、助成金、補助金の贈与を受ける方法です。

研究助成は、後者に該当し、法律的表現を借り

れば、条件付贈与金給付方式とでも言えましょう。この制度は年々盛んになってきていますが、その助成対象も、科学振興全般に関する研究から、当財団のように、多摩川及びその流域の環境問題に関する研究に限るものもあります。いささか特殊な研究助成を行なう財団ですが、研究者の意志を尊重し、自由で意欲的な研究を歓迎します。そして、研究の内容がまとまれば、何時でも募集受付をする事を原則としています。

- 発行日 昭和57年12月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125